

現代ギリシャ語キプロス方言の
アウトラインについて

八木橋 正雄

はじめに

私の研究ノートは、キプロス方言に関する現代ギリシア民衆口語の研究に関するものであり、先行文献として、Menardosの文献群（1896年から1925年にかけての論文）と、Newtonの文献と、Christodoulouの文献を基礎に、さらに、Mondry Beaudouin(1884)と、Sakellarios/Tá Kypriaká(1890-1891)を参照しながら、音韻法則を記述した。特にNewton(1972)による音韻記述に、現地での調査と、在ニコシアのMenelaos Christodoulou教授の指導による修正・加筆を加え、最も基本的な音韻規則に限定して、書き換えた。他の研究者に役立つように、若干の必要とされるべき箇所を修正し、より簡潔にかつ現実の音韻規則をより正確に反映できるように直した結果、以下ようになった。Newtonによる現代言語学上の研究は卓越しており、同書の“Summary of Phonological Rules”(同書p.119-131)が私の研究ノートの基礎となっているので、読者は、同箇所と比較検討されたい。

i. 名詞・形容詞・代名詞に関する規則

(N1) 語環境——+母音で、男性・中性の〔i〕以外の語幹末の母音は消去。消去された母音上の強勢は、後の母音へ移る。

(N2) 第3尾強勢を採る。(2または3モラの語では、初頭音節に強勢を置く。) ii. 動詞に関する規則

(V1) (a) {加音} —— の語環境で、|a| は、消失。

(b) _____ $\left[\begin{array}{c} i \\ e \\ o \end{array} \right]$ の語環境で、{加音} は、消失。

(V2) ①語幹末が、〔i〕または〔a〕の場合、②(語幹末が〔i〕の場合の、中・受動態の人称語尾との形態素複合の際を除き、)人称語尾側が母音で始まる際:

(a) 音素連続 |'i + e| から、|e| を消し込む。

(b) 母音接続の際の第2要素の消し込み(音素項目 |o u a e i|, もし同一母音の母音接続の際には、第1要素を消し込む)。

(V3) (a) [母音], [l], [r], [s]に続く、命令形2人称複数形 |ete| の第1要素 |e| を消し込む。

(b) 語環境

V $\left[\begin{array}{c} l \\ r \\ s \end{array} \right]$ _____

における、非強勢の目的語となる人称代名詞あるいは定冠詞を従える、命令形2人称単数形 |e| は、語末の |e| を消し込む。

iii. 一般規則 (下表の*印は、義務的規則を示す)

(*P1) すべての長母音は、短母音に置換される。

(*P2) 形態素間(語彙形態素・文法形態素)の語境界は消し込む。

(*P3) 語末の子音から、[n], [s]以外の全子音は消し込む。

(P4) (a) |k| → |tʃ|

(b) |k| → |ʃ| / 語環境【——前舌母音】において;

例外:(a) 語環境【——{人称語尾}】では、上の規則は適用されない。

第二の例外:(b) |f, r| に続く |x| に対しては、上の規則は適用されない。

(*P5) (a) |k| → |tʃ| / 語環境【——|tʃ|】において

(b) |x| → |ʃ| / 語環境【——|ʃ|】において

(P6) |l| → |r| / 語環境【——子音】において

(P7) |e| → |i| / 語環境【——母音】において

(P8) |i| → |j| / 語環境【——母音】において

例外:子音+ |r| に続く |i| に対しては、上の規則は適用されない。

(*P9) |'jV| → |j'V|

(例: |mantil'ju| → |mantilj'u|)

(P10) |t| → |ð| / 語環境【——|j|】において

(*P11) |t| → |ð| / 語環境【——|ð|】において

(P12) (a) |s| → |ʃ|

(b) |z| → |ʒ(硬口蓋歯茎音)| / 語環境【——|j|】

(P13) (*a) |j| → φ(ゼロ) / 語環境【 $\left[\begin{array}{c} tʃ \\ j \end{array} \right]$ ——】

において

(b) |j| → |k| / 語環境【 |r| ——】において

(c) |j| → |c| / 語環境【 阻害音(obstruent) [但し |ɾ| を除く] ——】において

(*P14) |tʃ| → |ʃ| / 語環境【 |s| ——】において

(*P15) |s| → |ʃ| / 語環境【 —— |ʃ| 】において

(P16) 閉鎖音| → 摩擦音 / 語環境【 —— |阻害歯音(dental obstruent)| 】において

(*P17) 子音| → φ (ゼロ) / 語環境【 [C —— |ʃ|]
|摩擦音| — |s|] 】において

(P18) (a) |n| は、それに続く継続音(continuant)と完全に同化する(ただし、|j| の場合を除く)。

(*b) |n| → |m| / 語環境【 —— |唇音| 】において

(P19) (a) 語環境【 —— [(同一) 子音|] 】において、二重子音は単子音化

(b) 鼻子音| → φ (ゼロ集合) / 語環境【 —— 閉鎖音(stop) + 歯擦音 】において

(*P20) 摩擦音は、それに続く摩擦音を有声化して、同化する。

(P21) (a) スリット摩擦音 (slit: where air is released over the surface of the articulators through a narrow, horizontal opening; f, θ, ç) | → 閉鎖音(stop) / 語環境【 —— 歯擦音 】において

(b) 歯音あるいは軟口蓋摩擦音 → 閉鎖音(stop) / 語環境【 子音 —— 】において

(P22) 有声スリット摩擦音 (slit) → φ (ゼロ集合) / 語環境【 V —— V 】において

(*P23) |ɾ| → φ (ゼロ集合) / 語環境【 —— |j| 】において

(*P24) (a) |ɾ| → |j|
(b) |k| → |c| } / 語環境【 —— 前舌母音】

(*P25) |k| → |c| / 語環境【 —— |j| 】において

(P26) ①無強勢母音 → φ (ゼロ集合) / 語環境: 同一の母音が先行する、二重母音の場合【 (同一) 母音 —— 】: および②無強勢母音 |e|

→ φ (ゼロ集合) / 語環境【 |a| ——】において

(P27) |θ θ| → |t t|

(P28) 有声摩擦音 → 無声摩擦音 / 語環境【 —— 閉鎖音】におい

て

(* P 2 9) 摩擦音 → φ (ゼロ集合) / 語環境【—— | r k |】において

(P 3 0) | θ | → | x | / 語環境【 $\begin{bmatrix} V \\ \neq \end{bmatrix}$ ——V】において

(P 3 1) 無声スリット摩擦音 (slit) → 有声スリット摩擦音 (slit) / 語環境【—— ソナント (母音性子音)】において

むすび

キプロス方言の音韻規則は、以下のように纏められます。その規則集をもって、本稿のむすびとします。

(I) 母音の時量縮減

[+長音] → φ

(II) 調音点の上昇 (= P 7)

[+前方] → [+高] / 語環境——V

([e] → [j] → [i])

(III) 音節中心に流音を置く (= P 6)

$\begin{bmatrix} +C \\ +V \end{bmatrix}$ → [-側音] / 語環境 —— $\begin{bmatrix} +C \\ -V \end{bmatrix}$

(IV) 半母音 [j] 無強勢化規則 (= P 8)

$\begin{bmatrix} -C \\ +高 \\ +前方 \end{bmatrix}$ → [-V] / 語環境 ——V (但し閉鎖音 + | r | の後を除く)

(但し、有声摩擦音の削除が先行し、優先する)

(V) 有声摩擦音の削除 (P 2 2)

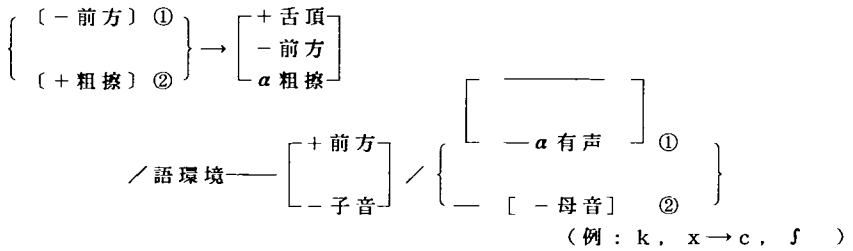
C → φ / 語環境 V $\begin{bmatrix} + 有 声 \\ + 持 続 \\ - 粗 擦 \\ - 鼻 音 \end{bmatrix}$ V

(VI) 歯音の弱化 (= P 1 0)

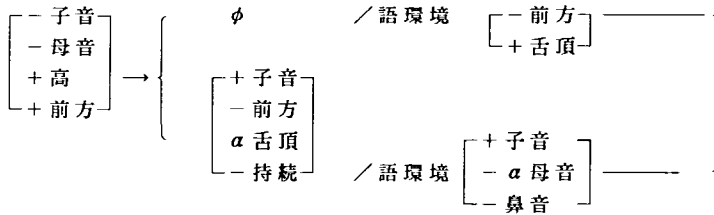
$\begin{bmatrix} + 前 方 \\ - 舌 頂 \\ - 持 続 \end{bmatrix}$ → $\begin{bmatrix} + 有 声 \\ + 持 続 \end{bmatrix}$ / 語環境 —— $\begin{bmatrix} - 有 声 \\ - 子 音 \end{bmatrix}$

(例 | t θ j | の実現)

(VII) 硬口蓋化 (= P 4, P 1 2, P 2 4)

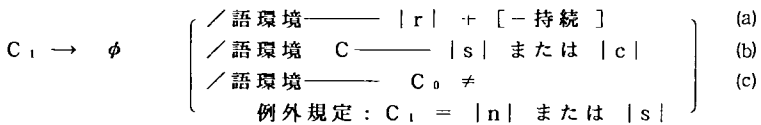


(VIII) C j 規則 (= p 1 3)

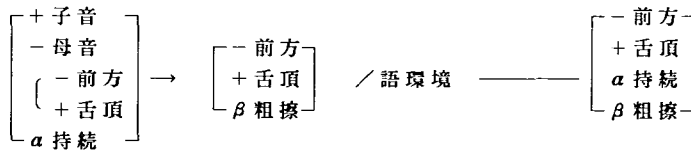


(例: 母音の前に置かれた |i| の [c] としての実現)

(IX) 単子音化 (= P 3, P 1 7, P 2 9)



(X) 硬口蓋同化 (= P 5, P 1 5, P 2 5)



(XI) 摩擦音—閉塞音規則 (P 1 6, P 2 1)

音素結合において:

$$\begin{matrix} [+子音] \\ [-鼻音] \end{matrix} \begin{matrix} [+子音] \\ [-母音] \\ [-鼻音] \end{matrix} \rightarrow \begin{cases} [+持続][-持続] / \text{語環境(a)} \\ [-持続][-持続] / \text{語環境(b)} \end{cases}$$

(a) [—] [C (ただし (f, v, s) を除く)]

(b) [—] [s]

(XII) 鼻音同化規則 (= P 1 8, P 1 9 b)

$$[+鼻音] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \phi / \text{語環境} \text{---} [-持続] + [+粗擦(strident)] \quad (a) \\ \begin{matrix} [\alpha \text{ 前方}] \\ [\beta \text{ 舌頂}] \end{matrix} / \text{語環境} \text{---} \begin{matrix} [\alpha \text{ 前方}] \\ [\beta \text{ 舌頂}] \end{matrix} \quad (b) \\ \begin{matrix} [\gamma \text{ 鼻音}] \\ [\delta \text{ 有声}] \end{matrix} / \text{語環境} \text{---} \begin{matrix} [+持続] \\ [\gamma \text{ 鼻音}] \\ [\delta \text{ 有声}] \end{matrix} \quad (c) \end{array} \right. \left. \begin{array}{l} \\ \\ \text{(例外: |m n| は保持され、同化されない)} \end{array} \right\}$$

(XIII) 二重子音の単子音化 (P 1 9 a)

$$C_1 \rightarrow \phi / \text{語環境} \text{---} C_2 C \quad (\text{但し: } C_1 = C_2)$$

(XIV) |θ θ| 規則 (P 2 7)

$$|\theta \theta| \rightarrow |t t|$$

(XV) 有声消失規則 (P 2 8)

$$\begin{matrix} [+子音] \\ [-母音] \\ [-鼻音] \end{matrix} \rightarrow [-有声] / \text{語環境} \text{---} [-持続]$$

(例: ['poθca] 「足」 [a'fko] 「卵」 ← ['poδia] , [a'v-
r o |])

各規則の適用順序:

I - II - IV - V - IX - XI - XIII - XV ; III - IV ; IV - V ; IV - VI ;

補記：

- (1) 閉鎖音は、鼻音または有声摩擦音の後で、有声化を生ずる。
- (2) 鼻音は、語頭が閉鎖音で始まる音素継起が続く場合には、消失し得る。また [z] の後で、語頭に立つ鼻音も、(|s| の連声変異体として) 消失し得る。
- (3) 無声阻害音(voiceless obstruents)の連続継起は、音声上の緊張を生じ、閉鎖音(stops) の場合には、氣息をともなう。
- (4) 母音の前の [x] ・母音に挟まれた [x] は、声門摩擦音から軟口蓋音に替わる。
- (5) 動詞 3 人称複数形文法形態素に -ousi, -asi を採る。
- (6) léei tou が tou léei, ákousá ton が tón ákousa の代わりに採られる。
- (7) ti の代わりに einta [inda] が広く用いられる。
- (8) 語彙上で、カサレヴサや、古語形が残存して、日常会話にも用いられる。
- (9) Dodecanese Islands の諸方言との間に関与的特徴 (5)~(7) を共有する。

主要参考文献：

- Newton, B. 1972. Cypriot Greek: its phonology and inflections. The Hague: Mouton.
- Newton, B. 1985. Cypriot Greek Revisited. GLOSSOLOGIA 2-3(1983-1984) 137-147. Athens.
- Christodoulou, M. 1970. Peri ton dialektikon zonon en ti nea Elliniki glossi kje tis theseos tis kipriakis dialektou en aftais. (Epetiris Kendrou Epistimonikon Erevnon Kiprou. Tomos 3.)
- Christodoulou, M. 1963. H Kipriaki Dialektos. Lefkosia: Philologiki Kiprou.
- Yagihashi, M. 1985. Gendai-girishago Kipros-hôgen no kenkyû. Yokohama: Yagihashi.